

{書評} 『ソーシャルベンチャーの理論と実践』

大関幸一

(元野村総合研究所研究部長)

我が国の抱える社会問題—少子高齢化、環境悪化、貧困、過疎化、教育環境の格差など枚挙にいとまがないほど案件は山積である。そうした問題への認識は国も十分あるのだが未だ公共サービスは不十分である。ニーズのあるところビジネスチャンスはあるはずだが、これらの分野は市場原理が働きにくく企業の参入は見送られてきた。こうした難しい問題の解決にあたらうとする事業者(あるいは事業主)を総称して「ソーシャルベンチャー」と呼ぶ(経産省はソーシャルビジネスという)。まだ知る人ぞ知るの世界なので一般の人には耳慣れない言葉だが 今や黎明期を迎えておりこれから否応なく注目される分野である。この本はそうした 時代背景の中 発行された啓発書、手引書といえよう。

内容を理解する手っ取り早い方法は実例を知ることである。最高の例はこの本でも紹介されているが ノーベル平和賞受賞者のムハメド・ユヌス(バングラデシュ出身)が作り上げた貧しい人のための「マイクロクレジット」そしてその機関、グラミン銀行である。200ドルというような少額金を無担保で融資して彼らの生産活動を助けるもので 今やバングラデシュ国内だけで、800万人がこれを利用しているという。貧困問題の打開策の一つとして有名である。日本の例としては規模は小さいが経産省の調べた55例が載っており インターネットで更なる情報が入手できる。また幾つかの実例も一つの章を設けて説明されている。この本では触れられていないが生協(生活協同組合)をメージすればソーシャルベンチャーの理解の一助になろう。

この種の事業を立ち上げていく上で最大の課題は資金調達と人材の発掘だがいづれの問題にも親切な説明が行われている。

アントレプレヌールシップ(起業家精神)に富み 善意と使命感をもって社会のひずみに心を痛めている人達が その解決に国でもなく 企業でもない第三の道があることを知ってもらうには同書は適切なガイドラインを提供するであろう。

東日本大震災をきっかけに澎湃として起こった助け合いの精神、利他の心を考えた時 この本は まさに時宜に適した出版といえる。なぜならそうした心こそソーシャルベンチャーの中心思想だから。

以上